「歌をつくるあなた」になるために

今はじめる人のための短歌入門

岡井隆

歳月はさぶしき乳をわかてども

のかどうか？
基本にふれ、
たしかめなが
の前でためら

角川選書

角川選書——5

今はじめる人のための短歌入門

昭和六十三年一月五日　初版発行

著者——岡井　隆
©Takashi Okai　1987
Printed in Japan
発行者——角川春樹　発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三　郵便番号一〇二　振替東京三-一九五二〇八
電話　営業〇三-三二六八-八五二一　編集〇三-三二六八-八四五一
装幀者——杉浦康平　協力——赤崎正一
印刷所——旭印刷株式会社　外装印刷——旭印刷株式会社
製本所——株式会社宮田製本所
定価はカバーに明記してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
ISBN4-04-703005-8　C0395

はじめる人のための短歌入門

隆

角川選書—5

*

今はじめる人のための短歌入門――――――――岡井隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

*

目次

なにからはじめようか――七
遊びとまじめ――一五
模写と風景――二三
批評のなかでのびる――三一
批評の基準――三九
読むことは作ることである――四七
初句と結句――五五
型について――六三
名詞をつかむ――七一
個別化への指向――七九
自然詠のはじまり――八七

自然の変化に注目する――九五
人間のいる自然詠――一〇三
自然詠と自然観――一一〇
社会詠のつくり方――一一八
新しい社会詠の模索――一三五
暗示としての社会詠――一三三
事柄でなく感情を――一四〇
題材の選択について――一四七
比喩について――一五五
読者を予想する――一六三
結社と歌会――一七〇
飛躍のための一章――一七八
あとがき――一八六

なにからはじめようか

和歌と短歌とは、どうちがうのでしょうか。

手もとにある簡単な辞書をひらいてみると、短歌のところには「和歌の一つの型式。五七五七七の五句、三十一音を基準とする」と書いてあります。すなわち、和歌といってもいろいろあるが、そのうちの一つが短歌なのだ、といっているのです。

そこで、ついでながら和歌の項目を引いてみましょう。「日本固有の形式による詩。長歌・短歌・旋頭歌（せどうか）などの総称。特に短歌」とあります。

また、短歌のことを、よく、〈うた〉ともいうので、ついでのついでながら、うたをあたってみると、「①声に節をつけて歌う言葉」という説明と、「②短歌。五七五七七の三十一音の和歌。更に広く、詩」という説明がならんでいます。

短歌をつくるということは、和歌をつくることであり、うたを作るという言い方とも、矛盾しないようになってきていることが、これらの辞書の解説でわかって来ます。

もともとは、口で歌って耳から聴く〈うた〉があった。文字のなかったむかしは、〈うた〉だけ

があった。それが、文字によって書きとどめられる段階で、大きな変化をうけることになったのでしょう。

耳で聴くだけの〈うた〉を、歌謡とよんでおきましょうか。歌謡には、長いのも短いのもあり、形のととのったのも不規則なのもあったでしょうが、それが、文字によって書きしるされて、眼によって読まれることになりますと、どうなるでしょうか。

まず、歌う人の肉声が消えてしまいます。肉声が消えてしまうということは、音楽的な美しさが、一たん消されてしまうということでしょう。一たん消えた音楽は、読者の想像のなかだけでよみがえります。最初は、歌謡という音楽の、歌詞の部分が書きとめられたにすぎなかったのでしょうが、そのうちに、文字で書かれた歌は、眼で読まれるためだけの文芸にまで変って行きました。

それなら、歌は、眼で読んで意味がとれ、文字面がうつくしいだけでいいのか、といえば、それだけでは駄目のようでした。

いまでも、そうでしょう。歌謡曲やフォーク・ソングを聴いて、一ぺんにいかれてしまい、すばらしいなとおもうのですが、歌詞は案外におぼえられない。おぼえていても、ところどころが、あいまいで、おぼえちがえをしていたりします。印刷になった歌詞を読むにおよんで、オヤッ、とおもうことがしばしばあります。

ねえ　ミルク　またふられたわ
忙しそうね　そのまま聞いて

というのは、中島みゆきの「ミルク32」のはじめのところですが、唄を聴いていたときには気がつかなかった五・七のリズムにおどろかされます。ネエミルク（五）マタフラレタワ（七）イソガシソウネ（七）ソノママキイテ（七）となっています。これは、どういうことなのでしょう。むつかしい理窟はぬきにしていえば、読む詩歌にも、むかしむかしの歌謡時代のなごりがのこっているということなのでしょうか。

音声が消え、肉声の支えが失われたとなると、かえって、詩は音の数によるリズム（五音とか七音とか三音四音とかいった、音の数による拍子のとり方）をととのえて行ったといえるのかも知れません。

その過程は、いまは問題ではないのです。いまは、すっかり、文字にたよって、読む文芸になってしまっている短歌も、別名で〈うた〉とよばれるような、音楽的な要素を、いたるところに残しているということ。歌謡から、広い意味の和歌が発生し、和歌のいくつかの型式のなかから、短歌だけが生きのこって来たという歴史的事実には、意外にふかい意味があったようにおもえるのです。

これから、短歌の世界にわけ入ろうとする人がみな、短歌の歴史を知っていなければならないな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

どということは、ないとおもいます。それは、また、別の知識や教養の世界かとおもうのですが、それにもかかわらず、ここで、短歌の祖先の話を、ちょっとしましたのは、次のようなことに注意をうながしたかったからなのです。

第一に、短歌は、声に出して唄われた時代のなごりをふかく受け継いだ詩である。だから、短歌に用いられる一語一語のひびきは、その一首の短歌のかなり重要な要素である。また、五・七・五・七・七という音の数によるリズムは、根本的な重要さをもっている。短歌が、単なる一行の短詩とはちがうところは、この音の数によるリズム（これを音数律という）によるのである。

第二に、短歌は、日本の伝統的な詩のなかで、最後に生きのこった二つのうちの一つである。（もう一つが、五・七・五の俳句であることはいうまでもありません。近代俳句が、どのような歴史的過程から生まれたかは、いま、問題にしません。）ということは、短歌には、おのおのの時代時代において、競いあういくつかの詩型があった。古代を例にとれば、短歌の母胎ともかんがえられる長歌があったり、兄弟詩型ともみられる片歌とか旋頭歌とか仏足石歌とかがあった。また、外国から輸入されて定着した漢詩があった。そういういくつもの競争相手との共存共栄のなかから、やがて、短歌だけが、生きのこって現代にいたった。そして、現代では、現代詩という、明治時代に、これも西欧詩の影響のもとに新生した自由詩型と、そしてもう一つの伝承詩である俳句と、共存している。つまり、短歌は、競合に耐えつつ、つねに、競合の場に立たされている詩型だという

こと。

短歌が、別名で和歌とよばれ、また単純に〈うた〉ともいわれるわけ合いには、このような事実がかくれていたのであります。

さて、「短歌入門」、なにからはじめましょうか。

大ていの入門書には、短歌をつくることは、けっしてむつかしいことではない、と書いてあります。だれにだって、すぐにできることなのだ、と。そして、自分のおもっていることを、素直に、そのまま、三十一音のリズムにのせて言えば、それが短歌なのである、というふうに言われるのであります。

短歌が、そんなにやさしい簡単なものなら、入門書の必要もありませんし、努力目標ともならないでしょう。

長いあいだ短歌をつくって来たわたしの実感は、短歌はむつかしいということであります。一部の天才的な作者をのぞいては、短歌をつくることは、困難な道であります。自分に満足のいく歌を生みだすためには、それ相応の努力をかさねなければならないのです。

この実感と、あの「歌はだれでもつくれる」という宣伝文とのあいだには、ひじょうなへだたりがあります。わたしは、「なにからはじめるか」という問いに対する第一の答えは、ここにあると

おもっています。まず、わたしと同じように、短歌作りは困難な道であり、むつかしい作業であると覚悟して下さい。それだけに、努力の目標ともなりうるのですから、そこに意義を見出して下さい。短歌をつくるための、一歩一歩の階梯(かいてい)について、これから、いろいろの場面や実例を示しながら、書いていく予定ですが、その一つ一つの階梯をまなぶまえに、短歌に立ちむかう態度をきびしくあらためておくのが大切かとおもいます。態度をかえてきびしくひきしめておきさえすれば、たとえ、途中で思いもかけなかった隘路(あいろ)にであったり、石ころにつまずいたりしても、がっかりしないですみます。

歌をつくるまえに、なにか用意する道具はあるでしょうか。メモ用紙とエンピツがあれば歌はできるという人がいます。安あがりの趣味で結構だという人もいます。わたしのせまい見聞の範囲でいうのですからまちがっているかも知れませんが、そういう言い方をする人の作品は、大てい中途はんぱのようですね。むろん、自嘲(じちょう)を含めた、冗談かも知れませんが、本音もちょっぴり入っています。わたしは、まじめに言うのですが、メモ帳とエンピツだけでは駄目です。下書きの段階としては、それでもいいでしょうが、やはり、ちゃんとした原稿用紙のマス目を一字一字埋めて、清書する作業が、肝要です。

なぜなら、清書するということは、自分の作品に検討を加え、批判を加える絶好の機会なのです。短歌をつくる作業は、（なにをつくる作業もそうであるように）なん段階かにわかれた、改作・修

正の過程です。

いいとおもって書きはじめても、第一句第二句（はじめの五音を初句とか第一句または一句といいます。「雉子の声やめば林の雨明るし幸福はいますぐ摑まねば」〔寺山修司〕でいえば、〈雉子の声〉が第一句、〈やめば林の〉が第二句、以下同様）まで来て、これは気に入らないと疑問を感じますと、すぐに書き変えをおこないます。

〈雉子の声やめば林の……〉と書く。

この「やめば」は「やみて」ではいけないのか。「やみぬ」と二句で切ったらどうなのか。第三句の「雨明るし」は「雨明し」と六音（字あまり）を、五音にもどしたらどうか。そういうこまかい修辞の上の変化もさることながら、発想の転換ということのためにも、清書は、大切です。その発想の転換があって、はじめて「幸福はいますぐ摑まねば」という、飛躍した下の句が、生まれたのかも知れないのです。

原稿用紙とボールペン（自分の気に入った書きやすいものが必要。エンピツでも万年筆でも、むろん、かまわない。）があれば、もうあとは、なにもいらないでしょうか。エンピツに対しては、消しゴムが、やはり必要でしょうが、かえって、原案を消さないでおくのも、いい場合があり、一がいにいえません。わたしは、そのためには、原案をのこした紙を、そのままにしておいて、あたらしく清書していく方法をとっていますし、人にもすすめています。

一首の歌は、一日のある瞬間に完成することもありましょうし、長い長い経過をへて、できあがることもあります。なん年ものあいだ放置してあった、未完成のメモに、あたらしく火がついて、一首の歌となるというような体験も、けっして稀ではないのです。

次回に、わたしは、道具としての辞書について、また、道具としてのお手本歌集について話そうとおもっていますが、一つだけ、「なにからはじめようか」という問いの項に、つけ加えておきたいことがあります。それは、「なにを歌うか」などということに腐心しないことです。うたうべきことなどは、この世にないといってもよく、また無数無限であるといってもいいのです。それは、その人その人が、生きて生活しているあいだに、おのずから、その人の胸に落ちてくるといってもいいでしょう。また、短歌という詩型が、おのずから、呼びよせてくれるといってもいいのです。

遊びとまじめ

「なに」とはなにかについて考えてみましょう。

前節のおわりのところで、すこし早口に言ってしまいましたが、

○　なにをうたうべきか。

という問題は、さしあたり放っておいていい、いや、その点は、もう気にしないで歌えという奨めであります。これは、いいでしょうね。わたしの言っているのは、歌人の使命であるとか、社会的責任とかいったことは、一人一人の人がかんがえればいいことなのであって、まったく無意味だと言っているのではありません。

ある意味で、わたしは、この問題を一生の懸案のように尊ぶ一人です。ただし、大切なことであるだけに、一人一人がみな違うはずだとおもうのです。一人一人がみな違うことについては、「短歌入門」の一般論のなかでは、触れるべきではありません。

わたしたちの前には、この短歌制作の道を一生のあいだ続けた人たち——有名な人もいますし、無名の人も多勢います——が、長い長い連鎖をつくって存在しています。そのうちのいくらかは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo